

の場ともなりうるのです。本学出版会には、編集の第一線で活躍していらした編集者の竹中龍太氏をお招きすることができました。編集のプロフェッショナルをぜひ竹中氏から学んでもらいたいと思います。四月の履修登録の際に、総合科目VI「キャリア開発・インターシップ支援」を登録し、指定された数時間の講義を集中的に受講したあとで本学出版会のインターンに応募すれば、この出版会で出版・編集業務のトレーニングを積むこともできるようにする計画です。これは、2単位に換算される正式の授業でし、就職活動に際して実際の出版社にエントリーシートを提出するときに、きっと役にたつはずです。

本学出版会は、今は図書館の四階に部屋を持っています。みなさんも図書館の四階フロアを歩くときに、ひとりの読者として、あるいはインターン候補として、そしてひょっとすると未来の書き手として、ぜひわたしたちのことを意識してみてください。

(いわさき・みのる 東京外国語大学出版会編集長)

叢書名 Pieria Books (ピエリア・ブックス) の由来

古代ギリシア人たちは、オリュンポス山を神々の住まうところと想像しましたが、ピエリアとはその北麓にあたる区域を指しています。地上に向かう神々が最初に降り立つ地であり、また何より、女神ムーサ（ミューズ）たちの生誕地とも見なされました。知られるとおり、ムーサは詩文や芸術をはじめ、あらゆる人間の知的活動を司る女神です。ムーサに見守られた者の口からは優美な言葉が流れだす、と古代の詩人は歌いました。

また、ピエリアの地でムーサたちの母となったのは「記憶」の女神ムネモシュネ。したがって、忘れてはならない大切なことを伝えていくのもムーサたちの働きです。はじめは口伝で歌い継がれたものが、やがて書物という形をとりました。

どうか、ピエリアと名づけたわたしたちの叢書が、ムーサの知恵を未来へと受け渡す優美な言葉に満ちたものになりますように。

岩崎 務 (いわさき・つとむ 本学出版会編集委員)

出版会ができた！

岩崎 稔

ようこそ新人生諸君。きみたちがこれから学ぼうという大学には、小粒ながら出版部門、東京外国語大学出版会があります。君たち同様、実はこちらもフレッシュなのです。

映像メディアの時代、インターネットの時代と言われながら、それでも書物はしたたかに生き残り、いまままだ、わたしたちの文化の精髓を容れる最善の器として、しっかりとした役割を果たしています。東京外国語大学は、ただ情報を蓄積し、伝達するだけでなく、それを形あるモノとして丁寧につくり上げ、知性に対する敬愛とともに、しっかりと次世代に受け渡していきたいと考えたからこそ、独自の出版会をもつことにしたのです。

二〇〇七年秋から準備が始まり、二〇〇八年秋に正式に発足し、この春には、最初の出版企画を世の中に問えるところまで漕ぎつけました。第一弾のラインナップは、学長である亀山郁夫先生の『ドストエフスキー 共苦する力』、著名な批評家でもある今福龍太先生の『身体としての書物』、そして日本文学の専門家である柴田勝二先生の『中上健次と村上春樹——〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』の三冊です。これ以後も、東京外国語大学を中心として展開されている国際的なネットワークをフル活用しながら、大学として社会に向かって熱い知を発信し続けます。

この出版会がめざしている出版活動は、第一に、他の大学では肉薄することのできない国境を越えた言語と文化のリアリティに迫ることです。第二に、他大学の追隨を許さない言語教育の教材とスキルを提供することです。そして第三に、空間と歴史の両面からアプローチした世界の政治・経済・文化の理解と分析のための道具を整えることなのです。みなさんも、大学の生協で、あるいは近くの書店で、本学出版会の書物が書架にあるのを見つけたら、ぜひともそれを手にとって、わたしたちのメッセージにしばし思いをはせてもらいたいと思います。

そればかりではありません。東京外国語大学出版会は、本学でまなんだ知識と見識を将来、出版やメディアの世界で活かしたいと願っている学生諸君には、職業教育の訓練